

# 文部省史料館報

第 8 号  
昭和 44 年 3 月

## 目 次

古文書館のことども……………	寶月 圭吾… 2
天誅組罷り通る……………	鈴木 壽… 3
持寄旦那寺について……………	浅井 潤子… 4
豆州内浦史料における京銭……………	榎本 宗次… 5
公銀貸付と大坂「融通組合」……………	鶴岡実枝子… 6
整理と保存	
民俗資料の保存管理（七）……………	中村俊亀智… 7
—「用途」の記載について—	
川柳と飛脚問屋十七屋……………	藤村潤一郎… 8
近世史料雑感……………	大野 瑞男… 11
生活用具の形態学・み（箕）……………	中村俊亀智… 12
Kさんへの手紙……………	原島 陽一… 14
第14回講習会のあとで—	
新収史料・受託史料紹介（承前）……………	15
休館予定について……………	10
彙報……………	16

## 古文書館のことども

寶 月 圭 吾



主として近世の古文書を対象とする古文書館の設立が、学界の問題として、はなばなしく取りあげられたのは、思い起すとも最早数年前のことである。その後この論議は、

何故か俄かに鳴りをひそめて今日に至っている。聞くところに拠れば、

日本歴史学協会の特別委員会の討議を経て設立原案が、いま学術会議に送られているという。

元来古文書館というものは、少くとも二つの責務を持つべきであろう。いうまでもなくその一つは古文書の蒐集保存であり、もう一つは利用である。曾て学界で激しい論議的になったのは、主として利用の面であった。その民主的な利用を如何にして実現するかが、当時の議論のわかれ目であり、いかにしてこれを集め、これを保存するかという重大

な問題は、ともすると利用問題の陰にかくれてしまった観があった。利用が究局の目的であることは勿論であるが、その為めにも、滅亡の瀬戸際にある古文書を、まず保存することとを考えなければならぬ。その意味でも、古文書館設立の議の一日も早い結実を待望しているのは、私人ではあるまい。

かように中央における問題処理が遅々としているにも拘らず、地方では古文書館の問題は、着々と進展している。私が関知している限りでも、数県でいまや県立古文書館設立の機が熟しつつある。それらは県史編纂事業の一環として、或いはその延長として、県内の古文書を集め保存し、且つ広く研究者の利用に供することを目的としている。かような県単位の古文書館の計画は、恐らく年を追って隆盛に赴くであろう。何れにしても、その地域の古文書を対象とし、まずその保存に重点をおく

公共的な施設が、全国に発展するようになったら、歴史学の発達のため、にどの位有効か計り知れないであろう。

一般的にいつて、歴史の研究は、地域的な特殊性の比較と、その総合の上に立てられるべきものである。

とするならば古文書館も歴史研究に対して基礎的な役割を果すためには、その地域的な特性を生かしつつ、それぞれが共通のルールの上に立って運営されることが必須要件である。さきに中央における古文書館設立の基本方針が、早期に固まることを冀望したのも、実はこのような立場からである。

地方的な古文書館が、その機能を十分に發揮するためには、緊密な連携が何よりも必要である。そしてその為めには、その媒介をなすものがないければならない。その役割を果すものとして、さしずめ史料館が適切であろう。現状においては、いろいろ困難な事情もあるが、史料館としても、少くともこれに応える創意と努力が、いまや必要であろう。

近世古文書が、現在なお激しい涸減の危機に瀕しつつある現実をみるにつけ、私は最近こんなことを考えているのである。

(筆者「写真」は東京大学名誉教授、東洋大学教授、当館評議員)

# 天誅組罷り通る

鈴木 壽

幕末文久三年、天誅組の挙兵―大和五條代官所襲撃(八月二)―及び大和高取城攻撃(八月二)に関する網文と多数の参照史料名がみえる。

したがって、この事変に関する史料を、事改めて紹介するほどのことはないが、この事変の波動が周辺の天領代官所などへ、どんなかたちで伝播したかを知らうる一例として、左記の史料を紹介することにしよう。

紙幅の関係で詳説できないが、この史料は南都吉野屋善治郎注進状の写で、北国街道信州下戸倉宿(天領)の名主柳沢氏が、附近の天領中之条代官所から職務上得た写しとみられる(柳沢利雄氏所蔵)。

八月十七日の天領大和五條陣屋急襲事件は、御用達である奈良吉野屋善治郎によって、江州信楽多羅尾代

官へ急報され、それより飛騨郡代を経て当信州中之条代官所へ連絡された。他の代官所へもリレーされたものとみられよう。八月二十日附の第一報は事件の概況の注進、同月二十五日附の第二報(但し、「昨日申上」兵趣旨と五條天領年貢減免宣言を内容とする天誅組の布告、についての注進である。五條代官所の役人は、手附手代十名(江戸詰九名)の外に、若干の足軽・中間などの下僚もいたものとみられるが、右の注進状では触れていない。なお、中之条代官所の郡中代中島氏の御用留には、八月二十六日天誅組の高取城攻撃に関する文書が収録されているが、割愛する。

此六人共首打取、接摩ハ五條住居ニ付妻子女首實録候由、其五五人ハ五條仕置場へ首掛り申候

御代官 鈴木 源内様  
元 長谷川 俗助様  
御手附 木村 祐三郎様  
御手代 恒川 庄次郎様  
御用人 黒崎 儀助様  
按摩 嘉吉

此四人ハ不知行衛

補付ニ而松井寺へ引連  
御手附 梅里原三郎様  
御手代 近藤 栄太郎様  
女中ハ何れへ御越候  
裁断与不相知候由

元 高橋 勇蔵様  
御手代 小原五良三様  
同 森脇真七郎様  
御手附 矢崎 永蔵様  
御手附 加賀 梅里原三郎様  
御手代 近藤 栄太郎様  
女中ハ何れへ御越候  
裁断与不相知候由

右者 去ル十七日夕河州表より追々相越中ニ茂大將者鉄形兜を着し、馬上ニ而拔身之鎧を携、其外甲冑拾人斗何れも拔身又者短き鉄炮所持、都合六七拾人罷越、矢庭ニ御陣屋前より鉄炮を打立御陣屋へ押込、前番六人首打取、式人繩付いたし暮六ツ半時一ト先松井寺与申寺へ首諸共連歸り候上、尚又一同評議いたし同夜八ツ過比御陣屋并ニ長屋ニいたる迄不残焼失為致しよし、御陣屋書物ハ不残松井寺へ持歸り同寺におて書類調中のよしニ而今に一同罷在候由、尤十八日夜々拾人斗和州高取植村様(註、高取藩主)方へ罷越候由、誠ニ恐敷訳ニ而五條表可致通行者も無之由風聞ニ御座候、右次第ニ而私方御用状差出し候而も御請取被下候方茂無之殊ニ困り居候事ニ御座候、不取敢相違無之処奉申上候以上、

八月廿日

福井祐右エ門様

吉野屋 善治郎

星野 唯平様  
藤尾 藤助様 (註、宛名四名は信楽代官所詰元々等)  
齊藤万右エ門様  
南都吉野屋善治郎注進状写

宿継を以申上候、然者昨日申上置候五條表ニ罷在候浪士、同所御支配所之分以後天野御直御民ニ候間、当年之年貢是迄之半限ニいたし可遣旨申之、則書下ニ致し郡中江可相触者、御陣屋許村役人江相達候趣、右書下ケ写左之通り、

今度此表発向之趣意者、近年攘夷被仰出候得共、土地人民預りの者ども専分己者驕奢之為与御民を害し、都而攘夷之教應を妨候族多、且追々御親征被仰出候調のため既了、当地代官鈴木内源ハ尤甚敷もの故加誅戮候、以後五條代官支配所之分天朝御直之御民ニ候間、神領を敬し君主を重んじ候御玉躰を可致拝承候、此度本ニ帰し候御祝寿として今年之御年貢是迄之通ニ御免被成遣候、向後取箇之事手輕ニいたし遣候得共、猶奏聞之上可致沙汰事、右之旨小民ニ至迄不洩様申聞難有拜戴仕可致忠勤候、

(文久三年) 亥八月

右之通書下ケ郡中へ相触べく旨申候候、俄ニ御座候右浪士多人数ニ而五條表ニ罷在名前等今以不相知、高取表もいまだ引合中之趣ニ御座候、此段不取敢宿継を以申

(七頁へ続く)



# 豆州内浦史料における京銭

## 榎 本 宗 次

前号において「正宝事録」にみえる京銭記載について簡単にふれたがそれが何故に後々まで続くかに関しては問題の残るところである。小稿では現在当館に所蔵されている豆州内浦史料を中心に、この問題を考察してみることとする。同史料は先に渋沢敬三編著により「豆州内浦漁民史料」と題して刊行され（以下『史料』とする）、漁村史、漁業史の研究史料として多くの研究者に利用され、その業績も数多く発表されたが最近では注目すべきものとして山口和雄氏の「豆州内浦漁民史料に現われた貨幣について」（経済学論集三三の一）がある。山口氏はこの中で『史料』に現われた貨幣を整理し、金銀貨および銭貨が内浦地方で、どのように流通したかを検討しておられるが、金銀貨についての論旨は極めて示唆に富むものであった。しかし銭貨についての指摘には些か疑義をおぼえるのである。

まず山口氏の銭貨についての要約を掲げると「京銭は寛永十三年寛永

銭の鑄造以後も依然通用した。ことに、正徳頃まではその流通はかなり一般的であったようである。ところが、元文四年鉄一文の寛永銭が鑄造され、それが多量に出廻るようになってからは京銭の流通高も次第に減少し、その価値も寛永鉄銭に比しかなり高くなった。しかしともかくも徳川期を通じ、前時代からの京銭が通用しつづけたのであって、このことは今ままであまり注意されなかった注目すべき点である。」と。

寛永十三年以降もかなりの期間京銭が流通したことは否定出来ないが——法令からみただけでも古銭の全面的通用禁止がなされたのは寛文十年であった——それを徳川期全体に及ぼすことは出来ないように思われる。では山口氏のこのような結論がでてくる論拠はなんであろうか。一つには『史料』に京銭記載とあるものを京銭が実際に使用されたと思倣すことから生じている。即ち同氏は「京銭は寛永十三年以降も依然使用されたのであって、このことはこの

史料集に収録された次の各年代の文書に、京銭または京なる文字が示されていることによっても明らかである」として、寛永二十年三月から享保十年十二月までの京銭記載の史料を指摘し、更に元文四年以降についても、京銭が実際には銭または米で支払う場合も出てきたとしながらも、やはり京、京銭の記載が各年次の文書にみえるから、京銭は依然通用したと説いている。

さらに、明治元年十二月の「重須村猪追足役割付帳」の中の左の史料を掲げ、「京銭は寛永鉄銭すなわち銀銭に比し次第に価値が高くなり、明治元年頃には三倍近くになったことが知られる」としている。

### 寛

- 一 京三貫文 年中猪追ちん
- 一 同老貫九百文 大土田修覆
- 一 同貳貫文 新土田修覆
- 一 同六貫五百文 拾三軒足役ちん
- 一 京拾三貫四百文

### 此 銭 三 拾 五 貫 五 百 拾 文

このように山口氏は京銭記載を京銭使用、京銭流通に直結されているのである。しかしながら同氏の掲げられた各年次の京銭記載の史料及び本文が『史料』に載っていない内浦史料の横帳類によって検討してみる

と、京銭記載は確に続いてはいるがそれは諸役銭の賦課や村入用の割付などが京銭でなされているのであって、実際は、その時々銭相場に応じた寛永銭（場合によっては金貨）によって納入されているように考えられる。即ち浅草御蔵番入用・三嶋御陣屋蔵番入用・大名主給・名主組頭雑用遣・定遣給等の村諸入用、舟役・高役・猪追役などの役銭は殆んど京銭で割付けられている。しかも各々の京銭高は連年一定の高である場合が多かった。例えば正徳元年から享保十年にいたるまでの「内浦組長浜村諸入用帳」をみると、定遣給は京四貫文、名主組頭雑用遣は正徳五年の京五貫五百文を除いて京五貫文である。しかも内浦史料に記載された京銭を換算してみると、万治三年から明治元年にいたるまで一兩四貫文替に一定している。しかるに元禄五・正徳二・享保一五・安永五・寛政四・文政四（いずれも同一史料に京銭と銭の併記してある場合からひろった）の夫々の寛永銭は一兩につき五貫文、四貫二百文、五貫三百文、五貫六百文、五貫五百文、六貫五四〇文である。

以上のことから京銭は永が補助計

# 公銀貸付と大坂「融通組合」

鶴岡実枝子

幕藩体制維持のための対症療法として大名・旗本・農村などに対して行われた公金貸付は、後期の幕府財政にとって重要な位置を占めていたと思われる。その貸付には町奉行・勘定奉行・遠国奉行・代官等が分掌したが、貸付仕法は時代・対象によって一様ではなかったと思われる。またその貸付資金も幕府自身の出資のみでなく、差加金として富商・富農からの醸出が行なわれ、一種の名目貸付として債権の保護が加えられたことは知られている。

三井大坂両替店の「聞書」に、つぎのような記事が発見された。  
天明三年卯冬

一先頃大坂有徳町人江御用金於西御役所御内々被仰付け様取々噂致候得共、曾而相知不申候処、卯十二月九日笠間御屋敷津久井武兵衛殿入来之節、京都御役屋敷が為御知有之由ニ而承之、御用被仰付け町人左之通

ところで、この種の公金貸付のうち、大阪の富商グループによって天明三年二月から始まった「融通御貸付」については、従来余り紹介されていらない。当時の代表的な大名貸商人であった鴻池や加嶋屋長田家の例でみれば、後期の大名貸に占める公銀貸付の比重は極めて大であるにも拘わらず、『大阪市史』などにこの「融通御貸付」について言及されていないことは不可思議に思われるところであった。ところがたまたま

(六百貫目)  
一カ舟目 嶋屋 市兵衛  
(八百七十貫目)  
一カ舟目 炭屋 善五郎

右之通御用金被仰付、年式朱半之御利足永々被下置候、尤右金高其儘出金之者へ直ニ御貸付ニ被仰付、年五朱之利足永々差上可申旨被仰付け由、右金高は御貸付之姿ニ而御役所銀之名目を以相廻し様ニとの噂ニ御座候事

幕府の大坂御金蔵為替請負の重要な情報としてキャッチされていた点、この時の御用金の徴集が内密に行われたことが窺われる。一般に大坂の信用機構の頂点に位置すると思われている十人両替を除外した大坂富商一軒で構成された「御貸附組合」から世上融通のためとして上納された総額八七〇〇貫目の御用銀は、年二・五%の利子付であったが、そのまま直ちに上納者へ拝借の形で下げ戻され、公銀名目で月利〇・八% (年利九・六%) で諸方へ貸付けられ、年五%の御益銀を貸附役所 (代官所) へ納入することになつており、結局出銀人は差引年利七・一%を取得する建前であった。公銀貸付とは云うものの、その資金は半永久的な御用銀による名目貸であつたわけ、長田家の貸付元帳でみると、その貸付には「自分一己之分」と「組合分」の区別があり、毎年二月上納の五%御益銀が組合分の貸付資金として再投下され、この分については年二・五%の利銀が上納されている。その貸付の対象は主として、当時大阪の金融梗塞に困難を来していた大名・旗本であり、宝暦以降同地で強化された米切手統制と無関係ではなかったと思われる。そしてこの「融通御貸附」は代官大屋四郎兵衛 (正巳) の発案によるものであつたことは、文化一〇年米価引立のための御用銀賦課に來阪した勘定奉行についての「草間伊助筆記」の記述に「是迄之融通御用之儀、大屋四郎兵衛様御取建被成、両御奉行并与力衆が申達候儀ニ而、御勘定奉行へハ竊迄ニ御座候」とあることによつて知られる。田沼の失脚で未遂に終つたが、一代官の発議が二年後の天明五・六年に全国的規模での御用金賦課による公金貸付計画に発展したことは興味あることである。因みに大屋四郎兵衛は田沼失脚後の寛政元年五月京都代官に転じたが、同年七月支配所のことに私曲あり、また二九御貸附金のこと不束なりとして

(六百貫目) 辰巳屋久左衛門  
(八百七十貫目) 近江屋休兵衛  
(千八百八十貫目) 加嶋屋久右衛門  
(九百貫目) 加嶋屋作兵衛  
(六百貫目) 助松屋忠兵衛  
(六百貫目) 長浜屋次右衛門  
(六百貫目) 炭屋 安兵衛  
(八百七十貫目) 炭屋 善五郎  
(六百貫目) 鴻池屋又右衛門  
(千五百貫目) 一仙サ舟目 鴻池屋善右衛門

幕府の大坂御金蔵為替請負の重要な情報としてキャッチされていた点、この時の御用金の徴集が内密に行われたことが窺われる。一般に大坂の信用機構の頂点に位置すると思われている十人両替を除外した大坂富商一軒で構成された「御貸附組合」から世上融通のためとして上納された総額八七〇〇貫目の御用銀は、年二・五%の利子付であったが、そのまま直ちに上納者へ拝借の形で下げ戻され、公銀名目で月利〇・八% (年利九・六%) で諸方へ貸付けられ、年五%の御益銀を貸附役所 (代官所) へ納入することになつており、結局出銀人は差引年利七・一%を取得する建前であった。公銀貸付とは云うものの、その資金は半永久的な御用銀による名目貸であつたわけ、長田家の貸付元帳でみると、その貸付には「自分一己之分」と「組合分」の区別があり、毎年二月上納の五%御益銀が組合分の貸付資金として再投下され、この分については年二・五%の利銀が上納されている。その貸付の対象は主として、当時大阪の金融梗塞に困難を来していた大名・旗本であり、宝暦以降同地で強化された米切手統制と無関係ではなかったと思われる。そしてこの「融通御貸附」は代官大屋四郎兵衛 (正巳) の発案によるものであつたことは、文化一〇年米価引立のための御用銀賦課に來阪した勘定奉行についての「草間伊助筆記」の記述に「是迄之融通御用之儀、大屋四郎兵衛様御取建被成、両御奉行并与力衆が申達候儀ニ而、御勘定奉行へハ竊迄ニ御座候」とあることによつて知られる。田沼の失脚で未遂に終つたが、一代官の発議が二年後の天明五・六年に全国的規模での御用金賦課による公金貸付計画に発展したことは興味あることである。因みに大屋四郎兵衛は田沼失脚後の寛政元年五月京都代官に転じたが、同年七月支配所のことに私曲あり、また二九御貸附金のこと不束なりとして

## 民俗資料の保存管理 (七)

## 「用途」の記載について

中 村 俊 亀 智

前回に引続き、有形民俗資料の保存管理カード(所謂基本カード)の記入方法について検討してみよう。

とくに、用途(使用方法)についてのこの項目の記載は、後々、例えば展示の資料として、あるいは、用途別分類の資料として、必ず、利用されるものであるから、従って、そうした場合のことを考慮にいれて、記入の方針をたてておかねばならぬ。

いし、勿論、記入の際、不明の点があれば、手をつくして、すみやかに、補足しておくべきであろう。

さて、用途についての質問項目としては、古くは、アチック・ミューゼアムの『民具調査要目』のうちに次の五項目がある。

- (1) 主としてどんな人が使用しますか(使用者の年令・職業・性別等)
- (2) 現在盛んに用いられていますか
- (3) 現在使われていないとすれば、何時頃まで盛んに用いられたものですか(現在の代替品は何ですか)
- (4) どんな場合、時季に用いますか
- (5) どのように用いますか 併用す

る民具が別にありますか

また、最近の『民俗資料調査収集の手びき』(文化財保護委員会事務局記念物課昭和四〇年刊)九〇頁以下に、収集記録作成の際の用途の項目についての説明がある。

ところで、この用途の記載ほど書きにくく、また、人によって、まちまちなものはないであろう。一口に、「どんな時、どのように用いますか」といって、その答を限られた数行におさめるといふ作業は、実際には、かなりやつかしい仕事である。

そこで、御参考までに、当館の所蔵資料のカードから、用途の記載例若干をあげ、この項目の記載が、今まで、どのようになされていたかを整理してみよう。

(一) イタヘゲボウチョウ「屋根板をへぐのに用いる」

(二) シンタ「イモを蒸すときに用いる」

シンタは、南西諸島で使われている鍋の蓋のこと。湯気の通りを考えためか、藁でこしらえてある。以

上の二例は、いわば、記入方法の多数派。使用の目的を明示する方法である。もっとも、もうすこし説明がほしいというようにも思われる。

(三) ショイバシゴ「畑の収穫物をつけて家に運ぶ。男女とも使った」この背負梯子は都下北多摩郡のある町で使われていたもので、背負梯子としては最大の型のものである。してみれば、「畑の収穫物」の内容が知りたくなる。

(四) ショイバシゴ「子供のためには小型のものを作って、一四、五歳から背負わせたものであった。この地方ではショイナワだけの運搬方法は用いない。ショイカゴには山行きの道具(鎌・鉋など)をいれる。」

この背負梯子は西川材で有名な奥武蔵の吾野川筋で採集されたもの。この地域の運搬方法、この用具を包む雰囲気(記録する人の心をとらえたのであろう。丁寧に記入されている。次も、資料の文化遺産としての面に重点をおいて説明してある。

(五) ワラジ「正月二日(旧暦)、仕事始めに作り、神棚にあげておく。一四日、お飾りと共におろし、履用する(お飾りやシメはドンドで焼く)。大正の中期までは

実際に履いたが、それ以後は使用しなくなった。」(岡山県井原市採集のワラジについての例)

(六) ハネゴイスケ「大雪のとき、屋根の雪おろしなどに用いる。木製は屋根をきずつけぬ特徴がある。石坂氏談」

ハネゴイスケは富山地方の雪鋤。この用具が使われる条件、利点などが、短かい記事のなかに、述べられている。私たちには、この型の記入の方法が、最も好ましいものに見える。この型の例をもう一つ。

(七) ハヤブサゾリ「此櫓は単にハヤブサともいっている。山の斜面急にして、四つ山櫓、及び、ウシ櫓の使用不可能な場合に、これを使用す。長き材木を運搬するのに適す。田中喜多美氏報」

しかし、実際に、以上のどの型をとるか、は、労力や時間等の条件次第で決ってくるのではなからうか。

(三頁より続く)

上候以上

文久三年

八月廿五日

江州しからき

吉野屋 善治郎

ならよしの屋敷用運る多羅尾  
様へ急状、夫より飛脚御那代、  
夫金当御役所へ参ル、

# 川柳と飛脚問屋十七屋

藤村潤一郎

あさつてはそばで見ますと十七屋

十七屋一丁遠く雪を見る (八一〇頁)

あさつてはそばで見ますと鳥屋い

ひ (八二二頁)

などの句がある。年代は不明である。この外に飛脚についての川柳で

気付いたものは、

武玉川二篇 (宝暦元年刊)

飛脚の膳は目の前で盛 (三二頁)

同四篇 (宝暦二年刊)

師走の飛脚長い脇ざし (六二頁)

同五篇 (宝暦二年改正点譜、同三年刊)

飛脚の息のかゝる明星 (八二頁)

飛脚に逢へと起すみどり子 (八二頁)

頁)

恥の飛脚のひそくと着 (八三頁)

飛脚まで軽い異見を口うつし (八三頁)

三頁)

同六篇 (宝暦二年改正点譜、同四年刊)

飛脚の顔をあふぐ女房 (九〇頁)

同七篇 (宝暦二年改正点譜、同四年刊)

飛脚の口のこる戒名 (一一二頁)

同十一篇 (宝暦七年刊)

三度飛脚に去状が着く (一六九頁)

同十五篇 (宝暦一一年刊)

ざぜん豆飛脚の膳を飛廻り (二三頁)

一頁)

柳多留四篇 (明和三年句合、同六年刊)

ぼたもちを飛脚へ出して物語 (一

卷一七五頁)

俳風柳多留拾遺第二十 拾篇 (俳風

柳多留拾遺) 下巻岩波文庫 (明和

四年句合)

御飛脚も久しひものと坐頭云 (一

八九頁)

さくらの実 (明和四年刊)

金飛脚状をよむ内どさら出し (三

六頁)

武玉川一八篇 (安永五年刊)

宰領のしびれをきらす米俵 (二八

一頁)

柳樽余稿川傍柳四篇 (初代川柳選

句集) 上巻岩波文庫 (天明二年刊)

しはられた飛脚を杓か来てほとき

眠狐 (二二二頁)

柳樽余稿やない筈二篇 (天明四年刊)

早飛脚十五夜お月見てかける 素

見 (八一頁)

「川柳大辞典」下巻 (四四九頁) に

目の前で盛って飛脚へ膳を出し

飛脚屋ぢや御座りませんと櫛屋い

ひ

とある。最後の句は、下谷池之端仲

町にあった櫛屋の屋号が九四の和、

十三屋で、川柳の題材になっ

てゐる。前記の飛脚屋十七屋にかけたの

である。「川柳大辞典」上巻八〇九

頁) 他にもまだあるだろう。

私はこういった方面に就いて趣味

大曲駒村編著「川柳大辞典」上巻

には、

じふしちや「十七屋」飛脚屋の異

称。十七夜は立待月と云うので、

托した手紙がたちまち着くの語呂

から来た称である。自ら十七屋孫

平と名乗った飛脚屋が、現に瀬戸

物町に在った。(八一頁)

しまや「島屋」①瀬戸物町の飛脚

屋、島屋佐右衛門。町内には沢山

の同業者があつたが、島屋が一番

繁昌したやうである。②小伝馬町

一丁目の呉服店島屋吉兵衛、この

家の番頭が小僧に暴行を加へたと

云ふので(中略)大評判であつた。

(八二二頁)

とある。この十七屋、島屋について

は次ぎの川柳がある。

武玉川六編 (川柳雑俳集) (宝暦

二年改正点譜、同四年刊)

十七屋立横に寝る人計 (九三頁)

さくらの実 (初代川柳選句集) 上

巻岩波文庫 (明和四年)

だらでばしござりましよふと十七

屋 (二九頁)

柳多留初篇 (俳風柳多留) 岩波文

庫 (明和二年刊)

はやり風十七屋からひきはじめ

(宝暦二二句合、一卷四九頁)

同二編 (明和三年刊)

吉原へてんねき配る十七屋 (宝暦

一三、一卷五七頁)

同八篇 (安永二年刊)

十七屋日本の内へあいといふ (明

和八、二巻二二九頁)

同十七篇 (天明二年刊)

十七屋とてんへいかにわたるまし

(安永八、四巻六九頁)

同十八篇 (天明三年刊)

十七屋もめん合羽へ馬を入レ (安

永八、四巻二〇七頁)

柳樽余稿やない筈初篇 (天明三年刊)

(初代川柳選句集) 下巻岩波文庫)

十七屋なかに恋文二三通 雨譚

(三〇頁)

また、今井卯木「川柳江戸砂子」(三

七頁) には

十七屋一町遠く富士を見せ

十七屋ほど兄さんも配るなり

前記の「川柳大辞典」上巻には



も智識もないため、これら川柳の意味を把握する事が出来ないので、飛脚問屋十七屋について紹介する事にしたい。

十七屋孫兵衛（近世には兵衛に平を宛てる事がある）は江戸室町二丁目善兵衛店、島屋佐右衛門は瀬戸物町新兵衛店にある江戸定飛脚問屋である。この点については、すでに綿谷雪「飛脚の話」（『日本橋』創刊号）に指摘されている。

後者が天明年間に著した「島屋佐右衛門家声録」に、寛延頃には「木曾海道ニ而三度荷物を十七屋と呼びならし、三度之とまる宿を世に十七屋といふほとに有し」としている。

また「仲間惣まくり」（『日本交通史料集成』第三輯一五四頁）には

天明年中之頃迄十七屋家業盛運の時節ニ而、其頃御府内ニ而童女たり共、十七屋と申飛脚屋ハたれ知らぬ者もなかりき、家運増長して時の支配人惣兵衛庄兵衛口舌才智に勝れ金銀潤沢ニ随ひ、天明三卯年より同七末年迄関東筋凶作打続き米価高値ニ付、奥州筋廻米御用筋ニ懸り合、御用金数多十七屋引負に相成、御返納難行届、依之追々御吟味之上十七屋孫兵衛店預

り人惣兵衛 御用懸り庄兵衛井御用金御拝借証人山城屋宗左衛門店預り人佐兵衛、京都近江屋、其外懸り合重き御仕置ニ相成、兩家業鉢家財共關所に被仰付、退転いたし候

とある。つぎに宝暦五年「江戸十七屋孫兵衛利足の願」（『三井文庫蔵』）にみえる印判は、「京飛脚屋拾七軒請合仲間印」であるから、京都の順番飛脚問屋仲間のうちの十七屋組江戸持店である。また享保一三年（宝暦一三年享）「十七屋仲間由緒書」（『三井文庫蔵』）には、京都の順番飛脚問屋のうち一九人が江戸の京宿に取扱を交渉したが、結局「京荷物配会所」を設立し、十七屋孫兵衛とした。のち二人が脱退して一七人になったとしている。

ところで前記の文章にみえる山城屋宗左衛門は北鞆町太右衛門店にある江戸定飛脚問屋であり、近江屋五兵衛は京都順番飛脚問屋であるが、彼等との関係を、天明六年五月に順番飛脚問屋の越後屋孫兵衛・笹屋七郎兵衛から近江屋五兵衛に宛てた「譲り証文之事」（『三井文庫蔵』）に次ぎの通り記している。

江戸室町貳町目十七屋孫兵衛店之儀者、八拾五年己前元禄十五庚午

年、貴殿我々先祖其外仲間中都合十七人申合被取立、年久敷相統仕来り、其間ニ仲間衆十四人者追々ニ組合相退被申、貴殿我々三人相残り持来り三拾貳年以前宝暦五亥年ニ者、北鞆町山城屋惣左衛門店組中ニ而致買得、其外近年ニ至、奥州仙台大町江梅原屋清兵衛と申出店差出シ、同国福島上町江十一屋太兵衛と申出店差出シ、家業向繁昌ニ相勤来り申儀ニ御座候処とあつて、十七人申合の店であり、組合持ち支配人任せの経営である。

ついで  
近來江戸支配人心得違ニ而松平陸奥守様御勝手向諸事引受、金子夥敷御用立、右ニ付江戸京ニ而大借出来ル処、御屋舖之御返済御延引ニ付、此節ニ至候而店相統無覺束相成

と現況をのべている。天明期の仙台藩は中津川武蔵調「御財用方全体之儀等品々御奉行衆被御聞届取調十ヶ条申達候留」（『近世社会経済叢書』五卷二六二頁）によると「其頃は三都は勿論御近郡辺銀主々迄も連年御不義理御通用も無之」状態で、十七屋がどのように仙台藩と関係したかは現在の処あきらかでない。

さて「文恭院殿御実紀 卷三」の

天明七年十二月五日の条（新訂増補国史大系四八巻「統徳川実紀 第一篇」五二頁）には、

寄合赤井豊前守忠晶勘定奉行職にあるうち。買上米穀により不精の事ども聞へければ。采邑千四百石の半を削られ。小普請に入られ。小普請松本伊豆守秀持同じ事により。再び采邑貳百五十石の内百石を収められて逼塞せしめらる。二丸留守居飯塚伊兵衛政長勘定吟味役勤務の節。買上米穀の事もて御前をとめらる。富士見宝蔵番の頭土山宗次郎孝之勘定の組頭職務の節。身持不宜。遊女に馴染。身請致し妾に召仕。且さいつ頃娘病死を官長へ届も致さず。うちく幼稚の娘賞請。娘兩人と書出し。そが上勘定組頭の節。買上米穀の事にて彼は御後聞事ども多く。果には家出致し。重々不届によつて死罪に行はる。又勘定評定所留役長滝四郎左衛門政央。実方兄土山宗次郎家出致し。同人娘幼稚のせつ病死を届も致さず。其方親類書にも娘耆人と書出置。兄宗次郎よりは娘兩人と偽書出し。ある夜娘兩人共宗次郎召連夜中忍出しなど。相違の儀取締申立段。不埒により御役儀召放。小普請入逼塞せ

しめらる。その他連坐のものまた多し。〔下巻註目〕小姓赤井兵庫忠郁父豊前守忠昂職放たれしにより。奥の勤を許され寄合とせらる。

とある。これについて「新訂寛政重

修諸家譜」に、赤井豊前守は「越後国羅米のはからひ等閑なることあり、しかのみならず、家財乏きとて土山宗次郎孝之等が私曲せし金子を借

うけし条越度」(四三二八頁)松本伊豆守は「越後国羅米のはからひ等閑」(六一五四頁)、土山宗次郎孝之は「御勘定組頭勤役のうち、御買米の事にあづかりしとき、公よりいださるゝところの金子を私に融通して、五百両余を貪取、剩御買米のゝこり滞りしを糺明せらるゝにいたり」(二二二六七頁)としている。

つぎに明和九年序神沢貞幹「翁草」(日本随筆大成)三期二卷六九三—八頁)には「御買米謀計於評定所判決」としてこの事件を記しており問題の十七屋が関連している事がわかる。十七屋孫兵衛下代惣兵衛、山城屋宗左衛門は獄門、京都近江屋五兵衛は死罪であり、科書によると天明六年九月に「北国米御買上有之飛脚問屋下代惣兵衛取計仙台米四万五千石金一両に付一石五斗五升替買請候に積にて右代金を先達而孫兵衛方より用

立金等差引相渡候筈に致規定御買上米代の前貸相願」い二万五千五百両をうけとつたが、その使用が不正であったのと、二重引当の偽証拠を出した事が問題にされている。

今の処この買米については余りよくわからないし、前記松平陸奥守御勝手向諸事がこれに当るのかも確認していない。

佐野善作「取引所投機取引論」(上巻一六四—七一頁)によると、赤井豊前守は天明五年五月江戸小網町に大阪正米切手注文取次所を設立しており、これは彼の勘定奉行辞任後の同六年十一月に停止している。佐野氏はこの会所は正米とは言っても、最初から帳合米を実施する真意から設立したとみている。だとすれば、

「寛天見聞記」(燕石十種)三一—八頁)にある文化期の「伊勢町の河岸へ米相場の会所を願ひ取建る是は正米にあらずして空米の相場也俗にとたんといふ勝負事なり」という米会所と同性質である。

また「翁草」には彼について、「同役松本伊豆守と心を合せて、専ら聚斂を旨とし、時めきけるが竟には其奸頭はれてかく衰廃せられける」とし、余りよく書いていない。

この田沼勘定奉行と飛脚問屋と

米の関係は後日にまつ事にする。

いずれにせよ飛脚問屋十七屋の歴史は元禄一五年から天明七年までの八五年間であり、前述の川柳の年代とはば合致する。

私には十七屋の名は立待月からもきているだろうが、十七人も無視できないのではないかと思う。そして単なる飛脚屋の異称として川柳がつくられたのではなく、有名な実名に基づいていると考えたい。

(六頁より続く)  
免職、小普請入りとなっている。

後期の大坂富商の大名貸が「加入貸」なる共同貸付によって危険分散を図ったことは知られている。この諸藩への共同貸付を行なう富商グループを融通仲間に擬せられることもあるが、化政期以降大阪における幕府の経済政策実施に当って、その推進力として利用された融通組合は、この天明三年に始まった「御貸附組合」を母胎とするものであり、幕府の御用機関として組織されたものであったと思われる。そして大坂町奉行所を介しての幕閣要路其他諸侯への融通御用、或いは幕末に累増した御用金の掛屋用務、また兵庫商社設立の構成メンバーとして重要な役割を果たしたのであった。

(五頁より続く)

算単位の役割を果たしたように、いわば「京建て」ともいうべき仕方補助計算単位に使用されたものと考えられる。したがって山口氏が指摘するように「京銭は流通高を次第に減じ……その価値も今までのように寛永銭と同一でなくなり、高くなった」のではなくて、一兩四貫文の名目的な「京」に対して寛永銭そのものの相場が安くなったのである。内浦ではこうした「京建て」と「永建て」とが併行し前者は銭貨の、後者は金貨の計算補助として長期にわたり使われたものと推定される。

休館予定について

収蔵庫燻蒸を行うのに伴い、左記期間は休館とし、閲覧事務を停止いたしますのでお知らせいたします。

記

五月二十九日(木)より  
六月三日(火)まで

大野 瑞 男

私ども史料館の職員は、史料の収集・整理・保存および調査研究に従事し、その結果を利用に供しているわけであるが、ここにいう史料とは「わが国の史料で主として近世のもの」(文部省設置法第十二条2)とあって、範囲・時代の限定だけはあるが、その内容には定義がない。それは法文であるためもあるが、すでに史料という語が一定概念を示す社会的なことばになっているからでもあらう。

ところが史料館は往々にして資料館などと誤記されるし、毎年開かれる近世史料担当職員講習会にも近世史料の内容がよく理解されずに、つまり江戸時代の古書籍整理担当の職員が申し込んだりする例もある。これは史料という語が社会化されていないからであらうか。

史料という語を官制上はじめて用いたのは、管見の範囲では明治二年四月に三条実美を総裁として和学講談所に設けられた史料編輯国史校正

局であらう。これが同年十月昌平校に移って国史編輯局となり、変遷を辿って同二八年帝国大学文科大学に史料編纂掛が置かれるに至り、今日の史料編纂所の前身となることはよく知られている。

史料編纂所の『大日本史料』の初刊は明治三四年であるから、このころから史料の語が一般に使用されるようになったことは当時の出版物の題とみればわかるであらう(ただし『維新史料』の発刊は同一〇年)。

右にみたように明治初年の史料編輯国史校正局は半年で替ってしまっただが、さきの和学講談所では『群書類従』のほかに文化二年頃より六国史のあとを継いで「史料」の編纂がはじまり、その一部は文久元年にでき上った。しかし残された史料稿本類は明治に入って修史局に移管されたのであるが、これらのことが明治初年に史料の語を用いさせた理由といえよう。

さて以上のことでは史料の定義にはならない。そこで『広辞苑』を繙いてみると、史料とは「歴史記述の素材。歴史の研究または編纂に必要な文献・遺物。文書・日記・記録・金石文・伝承・建築・絵画・彫刻など。」とあってはば説明してくれる。

また、松平文庫を特殊文庫とし一般図書と別扱いにし、ついでこれを国書・漢籍の部と藩史料の部に二大別している。図書・漢籍には百数十点の郷土資料を含めて印記を付し、また末尾に書名索引が付いている。藩史料には詳細な絵図・地誌解説を付している。そして前者は書名・著者名・刊年・形態・数量・請求記号、後者は表題・作成者・作成年・形態・数量・請求記号を目録化したほか、とくに後者に詳しい解題が施されている。

一般に図書館では近世史料を図書扱いの郷土資料に入れたり、一般図書に入れたりすることが多い現在、特殊文庫として別扱いした上で藩史料を分化したこと、印記・索引・解題を付したことなど関係者の努力に敬意を表するとともに、専門の私どもの努力の至らなさに恥入る次第である。しかし藩史料分類法と分類記号(M二桁数字)の付し方、ことに図書・漢籍の記号(M三桁)と類似して紛らわしいことなど不満はあるが望

の完成によって同文庫の利用の便のみならず、史料目録作成法に新方向を示した点で拍手を送りたい。

み (箕)

中 村 俊 亀 智

一、『和漢三才図会』には『説文』という書物に「除糞鍬之器」とあるのを引き「また、多く泉州上村で産する。楮の皮を割って経、篠竹を剥いで緯とし、これを、ちょうど、筵のように織って作る。縁には藤蔓を巻く」と述べている。

二、しかし、箕にはこのような殻箕(脱穀調整用の箕)のほか、さらに、茶箕、粉箕、雑箕(土運び、砂

利運びの箕など)があり、それぞれ用途に応じた作りがなされている。そこで、ここでは、所蔵の資料により、その形の幾つかを御紹介してみよう。

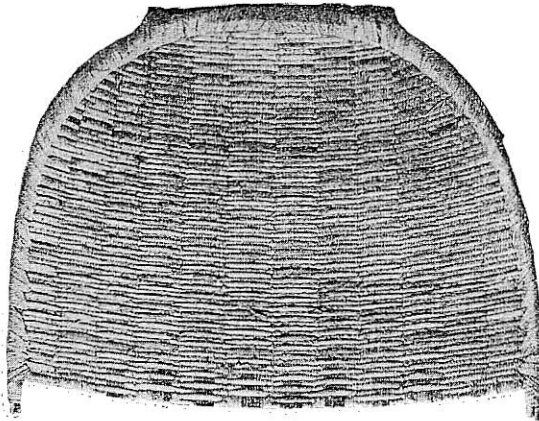
藤箕 所謂経に藤蔓(マフジの蔓を槌で叩いて平らに伸し、帯のように細かく裂いたもの)、緯に根曲竹、篠竹、あるいは、イタヤや山漆を用いる。縁は巻口仕上げ。殻箕として

全国的に普及している。『和漢三才図会』の箕もこの型に属するものと思われる。静岡県御殿場では、幅3cm、長さ八・五cmのユミという竹の板に、一筋の藤を結びつけ、これに緯の竹を通し、その間へ経の藤蔓を木刀で打込む。そのときの様子が、あたかも、機織の様子に似ているので、箕の場合には、「編む」といわず、「織る」というのだという。最後に綴じ合せ、ウシコロシの木をあてて縁を作る。先端の部分には樺(桜の皮)をはさむ。藤箕は、所によって、それぞれ若干の部分名がある。手元の深まった所はアクト

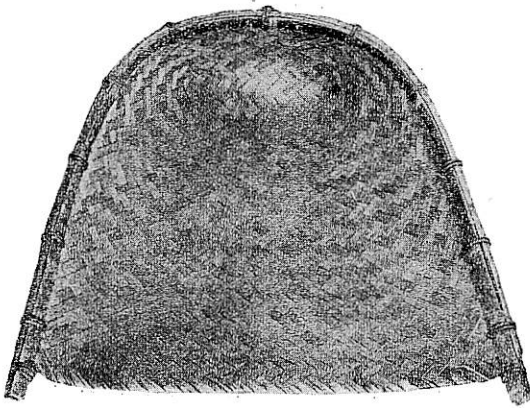
(踵)、カマド(竈)、両端をカタ(肩)、綴じシロをミミ(耳)などという。また、生産地によって独自の形があり、現在では、完全に規格化されている。その一例として、富山県氷見市の越中箕の場合をあげてみよう。

(種類)	(容量)	(長さ)	(深さ)
水車箕	一斗二升	五二・一 cm	一六・七 cm
大箕	一斗五升	五三・六 cm	一五・二 cm
中箕	一斗	五〇・〇 cm	一三・六 cm
小箕	八升	四八・五 cm	一三・一 cm
長箕	一斗五升	五三・三 cm	二六・六 cm

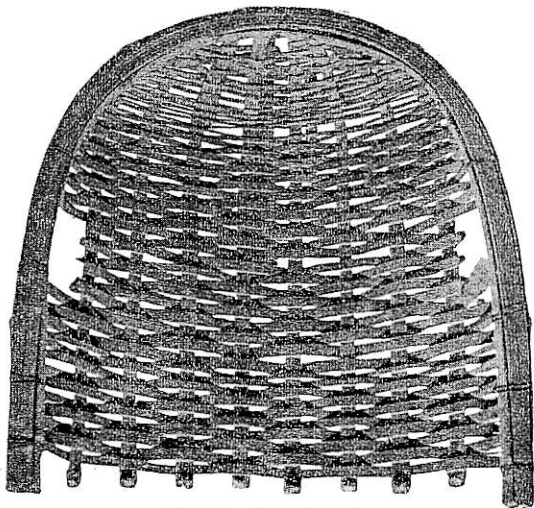
箕先の樺は水車箕、大箕、中箕で五枚、小箕、長箕で三枚という。



第一図 藤 箕



第二図 網代編の竹箕



第三図 竹箕箕目編の

竹箕 竹で編んだ箕。その編み方には網代編と箕目編の二様がある。縁は巻口仕上げ、または、野田口仕上げ。箕先には、芯をいれたり、節を利用して廻しの竹を押えるなどの工夫がなされている。穀箕、土運び、塵取りとして、竹細工の盛んな地方では盛んに利用されている。竹箕の作りには、箕のソーケや箕の手法がとりいれられているのである。

伊豆諸島では、メカイジャル、イモタツといって、イモをいれる箕形の器が用いられている。中央の部分は四つ目編である。

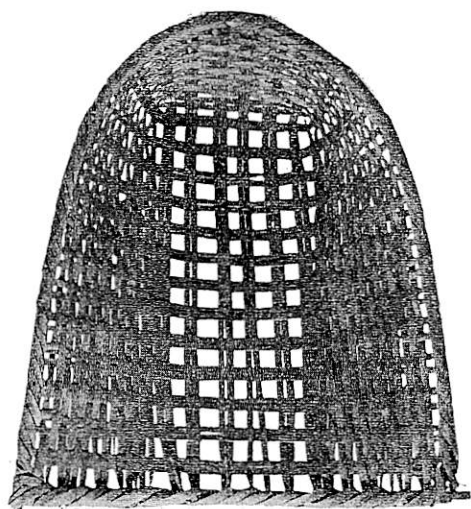
石箕 小石を運ぶのに用い、都下の山村では、サジといって、篠竹などを組んで編む。また、秋田のエブザル、エンブは柳の枝を束ね、これを開き、藁縄でからげたもので、その資料の一点には「土砂運びに用いる」との付票がある。エブザル型は他の地方でも、かなり、広く用いられているように思われる。

桑箕 蚕具。桑の葉を能率よくとるのに工夫されたもので、幅、長さとも約七〇cm。胴は六つ目

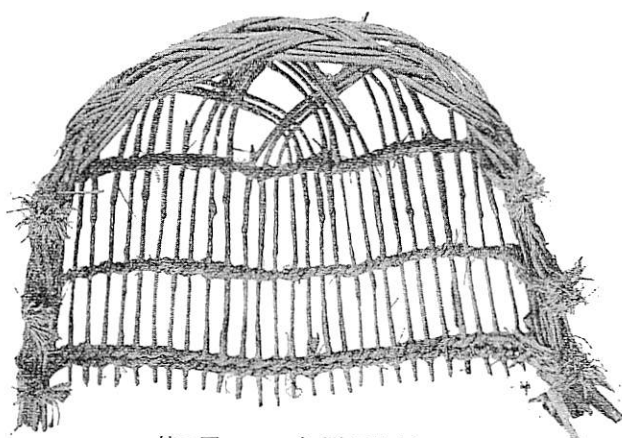
編。中央の平らな所は四つ目編。縁は巻口仕上げ。材料は根曲竹。重さ〇・九kg。採集地は長野県上田市。

皮箕 ヒノキやサワグルミの一枚皮で作る。皮が生乾きのうちに鉋の背に当てて折り、蔓で綴合せるといふ。岐阜県吉城郡国府村よりただ一例採集されている。しかし、同様の皮箕は長野県の下伊那地方、静岡県水窪町辺りにも行われているという。所蔵の皮箕は、藤箕や竹箕に比し、箕先の開きが広く、奥行きも浅い、古風な型である。

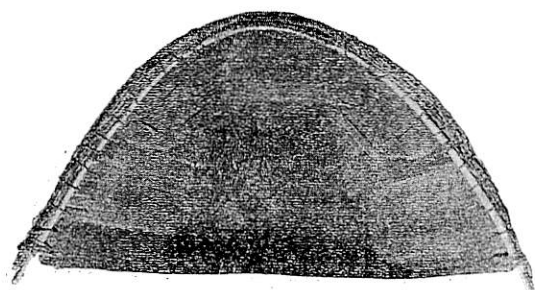
その他 所蔵資料以外では島根県津和野地方の板箕、北海道のムイ（木彫りの箕）など。



第四図 メカイジャル（新島本村）



第五図 エンブ（秋田地方）



第六図 皮箕（岐阜県国府村）

三、箕は、以上のように、その用途、製作方法等によって分けることも出来る。また、産地によって整理するのも一つの方法であろう。

四、箕は縁起物。種々の信仰や伝承が附随している。中部地方では、誕生祝に子供を箕に立たせ、一〇月一〇日のトオカンヤの夜には餅や大根をのせて、田の神を送るという。特に藤箕の産地では、その由来について伝承が残されていることが多くない。氷見の越中箕は蓮如上人布教の折、村人に伝えたといひ、山

形県次子では、昔、オサトさまという女人がその作り方を村人に伝えたという。調査の際には材料入手の方法、その隘路、工程、工具の種類・形態、明治以降の改良点と販路の変遷などが問題となる。

五、箕の保存には、虫害に留意する必要がある。編み目や縁の枝には、虫が潜伏しやすい。従って、燻蒸が必要となる。収蔵の際には、壁面にかかけたり、重ねて棚にのせておくことが多いが、踵を下にして立ておくこともできる。

## Kさんへの手紙

### ——第一四回講習会のあとで——

昨秋十月二日から六日間にわたった講習会が終って、やがて半年が経とうとしています。これがお手元に届く頃には、春の遅い北国にも花の便りがきかれることでしょう。その後いかがですか。講習会は何かと不行届なことが多く、改めてお許しを願う次第です。

見方によって長いとも短いとも云える講習会でしたが、少しでもお役に立っているでしょうか。あれもこれもと欲張った内容は、逆に散慢の感も与えますが、まだ追加すべき項目が落ちていたようにも思えます。必ずしも統一されなかった説明に却って困惑された点もあったかと心配です。でも、お座なりのきれいごとの講習会で、その場では分ったようでも、実際に当ってどうにもならなくなるよりは、いくらかまし、かとも思います。私共の準備不足が、それで許されるとは思いませんけれど。あなたを始め、お集りの皆さんがそれぞれ所属機関の性格や当面している問題に多少のヒラキはあるにし

ても、近世史料の保存や整理に真剣に取り組んでおられる様子に接するのは、毎回のことながら感動と敬意と責任とを感じずにはいられません。

その上、折角のご応募をお断りした方々が、皆さんとはほぼ同数の四十人以上もあり、更に前回までの講習生を加えれば、それほど少ないとはいえない数になるわけで、心強い限りです。各地で史料館や郷土史料室が独立の組織になって行くという話も、明るい見通しを抱かせます。これだけ多数の人が、似たような機関での仕事を通じて連絡しあって行けば、難問も片っ端しから処理できるような気にもなります。

が、まアそう樂觀してもいられないのが実状ですね。折角独立の組織になっても、その仕事を不要不急と見る眼が身近かにいたりして、肩身の狭い思いをさせられるなど、周囲の無理解のために無駄な努力を強いられることは、よく聞く話です。この点に関しても、まだまだ一般の関心を高めるための啓蒙活動が必要だ

と思います。その具体的方策についても考えねばなりません。

しかし、近世史料の取扱に関する問題が、何といっても一番重要で、これがまた、難問山積といった有様です。史料の所在調査、収集、

整理、分類、管理、それらを支える基礎的な調査研究——そのどれをとってみても、満足の答えの返ってこないことは、講習会でもかなりはつきりしたと思います。取扱の技術的研究を含めての基礎的研究の必要性と、それにも拘らず現状の貧しさとは、この仕事に携っている者が痛感していることでしょう。カードや目録の具体的指導を望まれる声が大きいの、その一つの現われです。この立遅れの原因には、一般の無理解や学界の熱意不足など根本的にもいくつかあると思います。必要性は知りながらも、手間のかかる割に報いの薄い地味な仕事のために避けているのです。困ったことに、厳正な判断を下す識者も基準もありません。現状では最善と考えられる目録も、使用に不便な目録も、評価は「一冊の目録」ということです。時には頁数の多寡だったりするので、それからあきれたものです。だからといって、安易な方法でその場を間に合せ

ていくのは、結局自分自身を傷つけることに外なりません。自分の仕事を大切に、各自が正確な識別力をもった批判者となって、お互いに向上を計っていく以外に解決の途はありません。理想は高く持つべきです。

そのためには、これらの問題を提案し討議することのできる共通の場が必要なわけで、それへの接近の方法として、講習会に参加した皆さんとお互いに連携していくことが考えられます。これは、座談会の席上で、今後の連絡などについて、いくつかの希望がありましたし、館長も関心をもっているようですから、何とか実現させたいものです。いま、実施の具体的方法などを検討中ですから、近いうちに実現すると思えます。始めは現況報告や情報交換から出発しても、それぞれに抱えた疑問なり不審なりは、対象や関心に多少の相異はあっても、必ずや共通の問題として受けとめられ、それらを通しての相互研鑽の中から、少しずつでも前進的な解決が生まれていくものと期待しています。

今後とも、何彼となく御協力下さるようお願いいたします。一層の御活躍とご健康を祈ってやみません。

三月某日 (原島陽一)



#### 四三年度新収史料紹介（承前）

※印は点数百点以下の少数史料、①はフィルムによる収集。

##### ◇播磨国池田家文書

播州姫路藩主池田輝政の四男輝澄の分流、旗本池田家の文書。現当主池田佐与氏（神奈川県茅ヶ崎市在住）の御芳志により新収史料として架蔵された。同家は寛文七年旗本として分立、播磨国神東・神西両郡之内三千石・一〇カ村を領し明治維新にいたった。

中期以降の史料が主であるが、池田家系譜類、家法史料、御役所日記、御布告写、御用書、幕府勤役史料、知行所関係史料、財政関係史料、絵図など、みるべき史料が多い。（文書総数二二〇点、一九括）

##### ◇薄井氏旧蔵記録

もと維新史料編集会の編集官であった薄井福治氏の所蔵にかかっているものである。その大部分は「大日本維新史料」編集のために、諸種の史料を同会の野紙に筆写したもので、中でも同氏担当の慶応四年（明治元）の分が多い。これらは維新史料稿本と何らかの意味で関連するものと思われる。ほかに、関係史料の調査・複

写書類や、東北・北陸地方の史料採訪旅行の調査報告メモ、及び大正一二年大震災以後の執務日誌などがある。（二六冊、七通、五八綴、二枚）

##### ◇常陸国土浦土屋家中大久保家文書

安政の獄に連坐し藩邸で幽閉中死去した大久保要および同家に関する史料。藩主家・藩政関係史料にも貴重なものがあるが、大部分は同家家系・家事家政・日記類とともに要履歴・政論、大坂城代公用人中記録、国事執掌中書類。諸家書状写類に貴重なものが多い。昭和三十六年収集史料と合体して、「史料館所蔵史料目録」第十五集に「大保家文書」として収録した。詳細はそれによられたい。（旧蔵者大久保正氏。総点数一二二通・三六冊・四巻・五通・一鋪・一帖・二括）

##### ◇武蔵国北多摩郡蔵敷村鈴木家文書

主として明治二〇～四〇年前後の私文書があり、これについて地租改正期前後の地方文書がまともについている。近世の村方文書には天保の五人組帳などがあるが、量は多くない。私文書の主要なものは糖・米商関係、製茶・養豚など同家が従事した諸々の経営関係、東京からの荷物運送関係、家計関係がまともについている。農事関係のものは種類は豊富だ

が、量は余り多くない。（現地名東京都北多摩郡大和町蔵敷、数量概数七〇〇冊余、書付六括余）

##### ◇①陸奥国会津若松築田家文書

会津若松の築田家は中世以来商人として、また近世に入ってからは大町検断として有名であるが、今回現当主築田英雄氏の御好意により同家伝来の史料のうち、享保七年から文政八年にいたる相場書扣帳十六冊をはじめとして、町中之由来、御國産一件、御土産物取扱方御仕法書、打綿中ケ間帳などをマイクロに複写した。（原文書現蔵者前述のとおり三リール、収載点数二十二冊）

##### ◇①出羽国鶴岡宇治家文書

近世を通して酒井氏の城下町鶴岡の大庄屋を勤めた宇治家の文書は、現在鶴岡市立図書館に所蔵されているが、今回、同館の御好意により全文書をマイクロに複写することができた。鶴岡惣御町御水帳、鶴岡御町例帳、惣町中無役屋敷数、御用金町割帳などの帳簿をはじめ、両肴町肴屋、道者宿、下旅館屋、酒屋、歩座史料など町方全般にわたっており、年代は寛文から幕末（九リール、一一九冊、二〇二通、絵図類二枚）

##### ◇①伊豆国田方郡丹那村川口家文書

同村名主川口家に伝来する文書のうち、北条氏直印判状二通・文禄三年検地帳をはじめ、寛永末―明治初年のほぼ連年の年貢割付、享保以後の名寄帳、寛政以後の宗門改帳、村明細帳、元禄以降の領主旗本酒井氏の触達（以前は伊豆代官支配）、願書類など主として村方文書を複写した。なお天正十八年以降の事実を記した年代記を除いて私文書は割愛した。（所蔵者東京都大田区田園調布四一五六川口次郎氏。六リール。収載点数七一冊・一三一通）

##### 受託史料

##### ◇板倉家文書

京都所司代板倉勝重の分流重種の後裔、板倉勝宏氏（現、東京都在住）所蔵の板倉家文書。同氏の御芳志により寄託史料として受入れられた。同家は下野烏山―武蔵岩槻―信濃坂木の諸城主を経て、元禄十五年奥州福島城主（三万石）明治元年三河重原藩（二万八千石）と変移した。初期史料は少量、福島時代の史料も少ない。板倉家系譜類、重原藩関係、三河長円寺関係史料が多い。特に、重原藩・版籍奉還・廃藩置県前後の史料にみるべきものが多い。（文書総数三三三三点）

昭和四三年度事業(承前)

一、近世史料の収集

別掲の大久保家文書ほか三件を購入し、川口家文書ほか二件をマイクロフィルムによる収集を実施したほか、板倉家文書を受託史料として受け入れた。

二、近世史料取扱講習会

第一四回近世史料取扱講習会を昭和四三年一〇月二一日より二六日まで当館で開催したが、詳細は本誌別稿を参照されたい。

三、刊行物

1、前号予告のとおり所蔵史料目録第一五集(常陸国土浦土屋家文書・土屋家中大久保家文書・秋元家中福井家文書)と、所蔵民族資料図版目録第二巻(日本篇生活用具)を刊行した。

2、史料館研究紀要第二号が刊行された。所収論文の題目を参考までに掲げておく。

旗本家法について(鈴木壽)

「榎本弥左衛門覚書」について——その紹介と彼の商業活動よりみた近世前期の市場構造の検討——(大野瑞男)

一八世紀以降の大名金融市場としての堂島——借銀担保の米切手をめぐって——(鶴岡実枝子)

天保甲州郡内騒動の諸断面(藤村潤一郎)

文部省史料館所蔵生活用具の研究(中村俊亀智)

四、マイクロ・フィルム収集史料の利用

当館がすでにマイクロ・フィルムによって収集した史料のうち、本年度から伊豆・山代官江川家および毛利家永代家老益田家文書のフィルムについて、マイクロ・リーダーによる閲覧を受け付けることとなり、すでに実施している。なお当面はプリントおよびリプリントの御要望には応じかねるので御諒承いただきたい。五、その他史料の貸出・閲覧を行なったが、史料の貸付はつぎの通りである。

◇43・10・4〜7 朝日放送株式会社 テレビ教養番組「すばらしきかな人間」——10進法は名案か—— 沖繩の菓算等7点

◇43・8・28〜9・6 日本勧業銀行 宝くじ展 富突箱等5点

◇43・9・17〜10・4 東京都 東京百年記念展覧会 商店の看板「あさくさのみ」等10点

◇43・10・14〜11・25 宮崎県立博物館 秋季特別展「宮崎の民俗資料展」 釣道具箱等15点

◇43・11・22〜26 朝日放送株式会社 テレビ教養番組「すばらしきかな人間」——文化の語り部は誰か——

パラオの手紙(結繩) 1点

◇43・10・14〜22 東京都中央区 中央区東京百年記念禁記念展示会 看板「煙草屋」等11点

なお、昭和四四年度事業計画は現在検討中であるが、近世史料取扱講習会は九月二九日——一〇月四日の期間開催の予定で、近世史料展示会と共に次号で詳細をお知らせしたい。

研究動向

○本年度科学研究費交付(一般研究D)

「近世知行制の研究」(鈴木壽)

○定例研究発表会

本年度下半期の定例研究発表会はつぎのとおり開かれた。

第二一回 43・7・26 天城御用炭

年期請負製炭について 浅井潤子

第二二回 43・9・26 享保後期の幕府財政史料について 大野瑞男

第二三回 43・12・19 天保甲州郡内騒動の落着御請証文について 藤

村潤一郎

第二四回 44・3・6 旗本家法史料について 鈴木壽

なお、本年度も隔月に開催の予定なので、多数の御参会を希望します。

人事異動

昭和四三年七月三一日付 高橋美津代 退職

昭和四三年八月一日付 森田 京子 採用

昭和四四年二月一日付 齊藤 重臣 採用

文部省社会教育局青少年教育課に転任

昭和四四年二月一日付 大内 登

国立磐梯青年の家から庶務係長に配置換

昭和四四年二月二八日付 森田 京子 退職

昭和四四年三月一日付 伊藤 米子 採用

採用

文部省史料館報 第八号

昭和四四年三月三一日発行

編集・発行者 小和田武紀

文部省史料館

印刷所 株式会社依田東文堂

東京都品川区豊町二ノ六ノ一〇

電話(783)九一〇六(代)

東京都江戸川区西小岩三ノ六ノ三

電話(六五二)〇二二(代表)